



Agilent SLIMS の管理されたオンボーディング：
Idorsia の成功事例

万全の準備

「オンボーディング」とは、デジタルツールを日々のワークフローに導入するプロセスです。オンボーディングプロセスでは特に、組織の既存業務にソフトウェアツールを統合することに重点を置きます。その目標は、新しいツールの効果的な使用に必要なスキルとリソースを従業員に提供することです。

オンボーディングの成否は、オンボーディングするソフトウェアの種類やデジタル化するワークフローの性質など、多くの要因によって決まります。このケーススタディでは、スイスの製薬会社である Idorsia が、管理されたアプローチによって、GMP ラボ運用を Agilent SLIMS ラボワークフロー管理ソフトウェアにオンボーディングした事例を紹介します。

理論上、問題なく稼働しているラボ環境に抜本的な運用変更を導入することは、「不可抗力と不動なものへの遭遇」という古典的なストーリーのように思えるかもしれません。進化論では生存のための適応が必要とされる一方で、「問題がなければ下手な手出しはするな」という現実的なアドバイスもあります。

このようなパラドックスを実際に解決できるのが、管理されたオンボーディングです。大きな変化にうまく対応するために重要なのは、破壊せずに適応するというハイブリッドな考え方です。ラボは管理されたオンボーディング計画を徹底的に検討し、慎重に実践することで、痛みを伴わずに成功への道を切り開くことができます。

ケース概要：Idorsia はスイスに拠点を置く医薬品研究企業であり、市場での成功、有望なパイプライン、優れたパートナーシップなど、多くの重要な面で順調に経営を進めています。Idorsia の ADQC 部門がシステムを紙のノートから最新の機能豊富なオールインワンの運用管理ソフトウェアプラットフォームに移行することを決定した際の期待（そしておそらく不安）は、非常に大きいものでした。



Jean-Maxime Pommery 氏

アソシエートディレクター兼
GxP ラボ自動化チームリーダー
Idorsia
スイス

Idorsia で働く職場の仲間である Jean-Maxime Pommery 氏（アシエントディレクター兼 GxP ラボ自動化チームリーダー）と Jérémy Lehning 氏（ビジネスシステムアナリスト）はこの準備のため、現実的な目標と明確に定義されたマイルストーンに基づく管理されたオンボーディング計画の策定に着手しました。その主な目標は、主要機能を移行して主要ユーザーが安心して使用できるようにすることで、ラボの継続的な進歩を後押しすることです。

Jean-Maxime Pommery 氏は次のように述べています。「論理上は、フル機能のシステムをすぐに稼働させて、あらゆる用途に対応すれば良いと思われるかもしれませんが、しかし実際には、当社では不可能でした。そこで最初に着手したのが、電子ラボノートの機能と関連業務です。必要な機能はすべてそこに集約されており、システムは非常に優れた柔軟性が高いものでした。私たちは GMP 側で紙ベースのシステムをオンライン化することを決定しました。これで GMP を実践できれば他でも可能であり、そうでなければすべて駄目であろうと考えたのです。振り返ってみれば、私たちは最も厳しい道を選択したのですが、その過程でシステムの機能を再確認できました。」

Jérémy Lehning 氏は、人的リソースがオンボーディング戦略に与えた影響について次のように強調しました。「私たちはたった 2 名の小さなグループで、GMP コンピュータシステムの責任者と管理者という役割を担っています。私たちはユーザーの有効化を管理し、システムの安定性を監視し、すべてを最新の状態にし、アプリケーションサーバーがエラーなしで正しく動作するようにして、データベースを安定化させなければなりません。また、構成変更を実施し、システム検証作業を管理します。複数の業務に忙殺されていたため、オンボーディングスケジュールを、希望より遅くてもマイルストーンには沿うように設定することを選択しました。」

オンボーディング計画で最も重要なのは、言うまでもなく導入すべき適切なソリューションの選択です。Idorsia ではビジネス、IT、運用上のさまざまな要素を検討した結果、Agilent SLIMS を選択しました。Agilent SLIMS は、ラボ情報管理システム（LIMS）と電子ラボノート（ELN）の機能を 1 つの包括的なワークフロー管理ソリューションにまとめたものです。

Jérémy Lehning 氏は次のように述べています。「私は少し違う職種からこの仕事に就きました。それまで SLIMS について聞いたことはなかったのですが、デジタル化のメリットは知っていました。導入に当たって直面した課題の一つは、紙ベースの業務に慣れた GMP ユーザーの同意を得ることでした。従来の方法は、冷蔵庫の横の日記に、依頼された業務と完了した業務、分析内容などを記録するというものでした。今はすべての情報を電子化する必要があり、QC 環境のワークフローが非常に厳格に規制されています。ユーザーはときに、新しいシステムの広範な管理や透明性、すなわち誰が何をいつ行ったかが即座に可視化されるという状況に慣れる必要があります。もちろん、このような情報に簡単にアクセスできることは有益ですが、適応には時間がかかる場合があります。」

Jean-Maxime Pommery 氏は次のように述べています。「成功の要因は、システムの構築と構成について、IT 側とビジネス側が非常に良好な協力体制を築いたことです。ただし、SLIMS 自体も成功に貢献しました。新しいシステムの導入時には、バグやその他の大きな課題の発生が見込まれますが、当社では、新システムの評価が下がるような問題は発生しませんでした。もちろん、ユーザーはインタフェースや、紙を使用しないことに慣れる必要があります。しかし、それをクリアすれば、システムが期待どおりに機能することを理解してもらえます。『このシステムは役に立たないから使わない』という声はありませんでした。こうなると、ユーザーの習慣を適応させることだけが課題になります。」

管理されたオンボーディング計画が優れていても、最終的な成果が現場の科学者のニーズに合わなければ成功できないというのは事実です。製薬事業などの規制の厳しい環境においては、新しいシステムが業務の複雑化ではなく簡素化に役立つことが理想的です。Jérémy Lehning 氏は、この重要な側面について次のように述べています。

「現場のユーザーは、システムを最適化している水面下のあらゆる IT 業務に着目したり関心を持ったりはしません。彼らは機器のユーザーインターフェースが使いやすく、困難な状況でも高品質なデータを提供してくれることを望んでいます。つまり、UI で作業能力を向上させる必要があるのです。利用可能なあらゆる表示と情報、各種モジュールとウィンドウは、ラボの業務を中断させるものではなく、業務への集中的な取り組みを可能にするものでなければなりません。SLIMS により主要業務を管理しやすくなるため、文書の流れがスムーズになります。ラボに向くと、日常業務に SLIMS が役立っているという声を耳にして非常に嬉しくなります。SLIMS によりサンプル、標準、装置などに関する迅速な情報取得などが可能になるためです。このような情報を紙ベースで見つけようとすると、記録やサンプルシートの担当者や数を調べる必要があり、多大な時間と手間がかかっていました。今ではログインしてフィルタを設定すれば、すでにサンプルがなくプロジェクトコードだけが残っている非常に古い分析でも、必要な情報をすぐに入手できます。」

まとめ

Idorsia が Agilent SLIMS ソフトウェアを既存のワークフローにオンボーディングするには、計画と実行の両方に細心の注意を払う必要がありました。同社はユーザーのニーズ、ビジネス上の期待値、利用可能な IT リソースを正確に評価することで、合意した優先事項とその進捗を監視するための明確なマイルストーンに基づき、現実的なスケジュールを設定できました。Idorsia における SLIMS エンドユーザーからのフィードバックが、この成功を裏付けています。ユーザーからは、新しいソフトウェアをワークフローに統合する方法が良かったという意見や、日常業務の重要な面が改善されたという報告が上がっています。

SLIMS の web ページ

ホームページ

www.agilent.com/chem/jp

カスタムコンタクトセンタ

0120-477-111

email_japan@agilent.com

本製品は一般的な実験用途での使用を想定しており、医薬品医療機器等法に基づく登録を行っておりません。本文書に記載の情報、説明、製品仕様等は予告なしに変更されることがあります。

DE-010807

アジレント・テクノロジー株式会社

© Agilent Technologies, Inc. 2025

Printed in Japan, November 14, 2025

5994-8807JAJP